

アイシャ・ガニの少女時代

英領期マラヤのムスリム社会におけるジェンダー規範と葛藤

光成 歩

はじめに

本稿は、1950年代以降のジェンダー規範の変容について、この時期に青年期を迎えたムスリム女性のライフヒストリーに着目して考察を行う。ジェンダー規範の流動化に伴う議論は、女性と教育、女性と親、女性と夫（結婚）など、女性を軸にした関係性の再定義の要請として展開された。就学や就業を通じた社会的ならびに空間的移動を果たしたムスリム女性の経験において、これらの関係性がどのように位置づけられ、変わっていったのかを検討する。

具体的には、マレーシアの政治家アイシャ・ガニ (Aishah Ghani, 1923-2013年、以下アイシャ) による『アイシャ・ガニ——ある闘士の回顧録』(Aishah Ghani—Memoir Seorang Pejuang、以下、回顧録) を取り上げる。アイシャは1923年に生まれ、10代始めから教育を求めてインドネシアに渡るなど、未婚女性の行動に制約が多かった時代にムスリム女性として突出した移動経験をもった。第二次世界大戦後は記者の傍ら政治活動にも従事し、1970年代から1980年代にかけて、マレー人政党UMNOの婦人部長かつ福祉大臣としてイスラム家族法の改革に尽力したことで知られる [Manderson 1980; Dancz 1987]。他方、少女期のアイシャは、未婚のムスリム女性をめぐる規範との葛藤や挫折も経験した。アイシャのライフヒストリーは、ムスリム社会全体において就学や就業の機会が拡大する時代にあって、女性がどのような障害を経験したかを知る重要な手掛かりとなる。

全19章¹⁾ からなる回顧録のうち、本稿では、スンガイスライに生まれ、勉強好きだったアイシャが両

親を説得してインドネシアへの留学をかなえる第1章「少女時代」と、日本軍の侵攻を受けてマラヤに帰還したのち教師としてペラ州に赴任する第2章「日本軍政期の暮らし」を取り上げる。一人称の記述を三人称に改めたこと、適宜注釈を入れたこと以外では、回顧録の記述をほぼそのまま翻訳して紹介している。ここから、少女時代のアイシャが教育を追求することで直面した女性と結婚をめぐる規範との葛藤や、女子教育をめぐる当時の動向、また、飢えとインフレが蔓延した日本軍政期の特異な状況下における女性の地位の変化を紐解いていく。

1. アイシャの生まれた村

アイシャ・ガニは、1923年12月15日にスランゴール州ウルランガット郡のスンガイスライで生まれた²⁾。マレー連合諸州の首府クアラルンプールから約18kmのスンガイスライは、大通り³⁾に隣接していたが、道が悪く、バスやタクシーも滅多に通らなかったため、村はとても静かだった。村の近くにはランガット川⁴⁾が流れていた。村人たちは、遠出する際には自転車を使い、普段はもっぱら徒歩で移動していた。

ウルランガット郡に学校はわずかしかなかく、スンガイスライにも学校はなかった。もっとも近くのプ

2) アイシャの母マユナ (Mayuna) と父アブドゥル・ガニ・サハバット (Abdul Ghani bin Sahabat) はスマトラ出身で、アイシャが生まれる前にスランゴール州に移住した。両親が移民であることは回顧録には記述がなく、聞き取りで明らかになっている [Arba'iyah Mohd Noor: 125-126]。回顧録には、明記されないがアイシャやスンガイスライの村落社会が母系制の慣習に従っていたことが伺える記述もある。たとえば「新郎が怒って母親の家に帰った」という記述 (本稿2節) や、親族を指すのに母系制社会の語彙が用いられる箇所 (本稿7節) など。

3) 19世紀末にクアラルンプールとウルランガットの主要な村落を結ぶ幅5mの道路が建設された。ウルランガットは19世紀末の内戦のために過疎化していたが、この頃以降、コーヒーとゴムのプランテーション栽培が広まり、スマトラやジャワ、のちにインドから人口が流入した [Gullick 2004: 94-96; 122-124]。

4) スアン山からマラッカ海峡に流れ込む川。川沿いのカジャン、チュラス、レコには錫産業の拠点が形成された [Gullick 2004: 94-96]。

1) 少女時代／日本軍政期の暮らし／政治への関わり／UMNO入党／ロンドン留学／1955年と1959年の総選挙／記者の仕事に戻る／上院へ／UMNO婦人部の活動／UMNOへの女性の貢献／1969年5月13日事件／国家運営評議会／移行期／女性に吹いた変化の風／トゥン・アブドゥル・ラザクの良い便り／イスラム家族法／UMNO婦人部の25年／課題と成功／理想の中のマレーシア。



アイシャ・ガニ関連地図

キラヤ・マレー語学校 (Sekolah Melayu Bukit Raya) まで3 km以上あり、アイシャは、往復6 km以上ある道を徒歩で通った。幸い、当時は本や学用品は多くなく、1年生から5年生まで、持参する必要があったのは、石板、筆、鉛筆、ノート、読本だけだった。それ以外に母がご飯を2包み持たせてくれたので、1つは休憩時間に、もう1つは昼食に食べた。普段は午後3時に帰宅していた。

当時の両親にとって女子の教育はそれほど重要でなかった。アイシャは学校に通ったが、多くの友人たちは学校に行くことはなかった。女性は妻になり、子供の世話をし、人生の終わりまで家を守る⁵⁾だけだと考えられていた。幼い頃から女子は厳しくしつけられた。女子がしてはいけないとされたことはとても多く、冗談を言ったり大笑いしたりすると礼儀正しくないと見なされた。10歳までは男子と遊ぶことができたが、10歳をすぎると家に閉じ込められた⁶⁾。一旦家に閉じ込められると、すべての行動が監視され、外出は礼拝所、井戸や水浴び場、川での洗濯など、重要な用事でしか許されなかった。果樹園や農園に行きたい場合は両親の同伴が必要で、家族以外の男性に挨拶するのは淫らだと考えられた。そういったことをしたと知られれば叱られ、殴られることもあった。

親たちは娘が恋に落ちることを心配しており、このことも女子に読み書きを教えない理由だった。娘たちが読み書きを身につければ、彼女たちは自分の夫を自分で選び、もはや両親に従わないだろうと考

5) 原文の表現 *penunggu rumah*は、直訳すると「家で待つ人」。

6) 結婚適齢に近づいた少女を異性の目に触れさせないように家に閉じ込める閉居 (*pingitan*) の慣習を指す。

えられていた。学校に行かなかったアイシャの友人のいくつかは、読み書きはできなくても恋をしていた。恋をしている人は、水浴び場、礼拝所、川での水浴びに行く道中で恋人に会う機会を見つけたものだった。瞬きと優しい微笑みで交わされる愛のメッセージで、若い心は両思いになっていった。読み書きが得意でも、想い人にラブレターを送るのは簡単でなかった。郵便局が遠すぎたり他人の手に渡るのを恐れしたりして、手紙はほとんど投函されなかった。「お父さんに言わないで」と口止めされた弟が小遣いをもってメッセージャーとなったものだった。

2. 1930年代の結婚

10代の少女は、料理、繕い物を含む裁縫、そしてその他の家事がこなせるよう育てられ、訓練された。現代的な化粧品はまだなく、『双妹嚶』(Cap Dua Nyonya) ブランドの固型おしろいと冷やしおしろい (*bedak sejuk*) があるくらいだった。冷やしおしろいは米から作った。米を瓶に入れて水に浸し、自然に崩れるようになるまで6ヶ月以上保存した後、のり状になるまで絞り、布でろ過して沈殿させる。ドロドロの部分混せて清潔な布に滴らして乾かし、最後にポプリーで香りづけする。美しく見せるためにアイライナーが使われた。長くウェーブした髪は美しいと考えられており、母親は娘の髪を伸ばそうとした。その方法の一つに、何度か髪を剃って焦がしたクイの実⁷⁾の油を塗るといったものがあった。5歳くらいの少女が禿頭になってクイの実油を塗られているのは見慣れた光景だった。豊かな髪は普通、巻いてお団子にしたり、二つに分けて編み込んだりした。

早く婚約するほど良いとされ、女子が12、13歳になると両親は落ち着かなくなった。男子も17、18歳になるとすぐに結婚した。結婚する女子は自分で寝具を用意するものだった。蚊帳、枕、シーツ、枕カバーなどのアイテムは、縫い糸や金糸を使って自分で刺繍するもので、それができないと恥をかいた。婚約するとすぐに結婚するので、娘たちは閉居の間、刺繍や縫い物、その他嫁入り支度を整えるように教えられた。

13、14歳になったばかりで結婚を控えた友人たちは、結婚の明確なイメージを得られないなかで、新しい世界に入ることへの恐れや不安をよく話した。結

7) クイの実には脂肪分が多く、煎って食用にしたり油をとったりした。実は硬い殻に覆われており、マレー語で *buah keras* (「硬い実」の意味) と呼ばれる。

婚について指導を受けるのは普通は男子だけで、女子たちは友人から経験談を聞くだけだった。結婚した二人は自ずから子作りの仕方が分ると大人たちは考えていた。したがって、夫と過ごす最初の夜に新婦が隠れようとするのはよくあることだった。

当時の結婚で興味深い点は、新婚夫婦の床入りが済んだかどうかを知りたがる周囲の関心の高さだった。花嫁の母親は、自分の娘が処女だったと確認されるまで不安を抱えた。証拠を得るために、通常、白い布がシーツとして使用された。うまくいけば布に痕跡が残り、それを新郎の家族への証にできた。花嫁の純潔が疑われるか、傷つけられていたと思われる時には、新郎は激怒した。マットレスや枕を引き裂いて母親の家に戻った人もいた。この種の事件は村じゅうの話題の種となり、新婦の家族の恥となった。一方、すべてが無事にすめば、黄色く炊き上げたもち米が食事に供された。

3. 進学を諦める

ブキラヤ・マレー語学校⁸⁾には、1930年に入学し、1934年に5年生まで修了した。その日から、マレー語学校だけでなく、できるだけ高いレベルまで勉強を続けたいと思い始めた。アイシャが育ったのはつましい家庭で、父は宗教教育機関ポンドックで宗教教育を受けた信仰心の強い人だった。母は学校に行ったことがなかった。姉2人は学校に行かず、兄2人は学校に行ったので、家族のなかで女性は皆読み書きができなかった。しかし、アイシャの姉の1人は、インドネシア出身の宗教教師であるアブドゥル・ハリム (Abdul Halim) と結婚していた。この義理の兄が、女子教育についての両親の考えや態度を変えたのだった。アブドゥル・ハリムはカンボンバトゥに宗教学校を開いており、アイシャもマレー語学校が終わった午後そこで宗教を勉強した。

アイシャがブキラヤ・マレー語学校4年生のころ、学校に女性の監督官が訪れた。校長には、その日は清潔な服を着てくるよう言われていた。監督官はコンティック・カマリア・アフマド⁹⁾と言った。コンティッ

クは赤いスポーツカーを運転していた。当時約20歳の彼女の訪問中、校長はコンティックの言葉に同意して始終うなずいていた。アイシャは、「コンティックさんが監督官になり、スポーツカーを運転し、男性の校長に指示を与えることができるのならば、女性は家を守ることにしかできないというのは社会の誤解だ」と感じた。コンティックの訪問で、アイシャは、進歩のためには女性があらゆる障害を乗り越える勇気と教育が必要だという確信を持った。

校長は、コンティックは英語教育を受けたので英語が得意だと教えてくれた。彼女のように女性が車を運転でき、男性の校長に指示を出すことができるとしていなかったアイシャは、啞然としてコンティックに魅了された。

コンティックの訪問はアイシャに強い印象を残した。アイシャはコンティックと彼女のスポーツカーについて父親に話した。コンティックが学校に通って英語も堪能だという校長の話をして、自分も英語を学びたいと言うと、父は、イスラム教徒がキリスト教の学校に行くのは礼拝の報酬を帳消しにする良くない行いだと言及して即答した。アイシャは父の言うことはもっともだと考え、黙って父の話を聞いた。

同年、アイシャの学校をモハマド・ユソフ・アフマド (Mohd. Yusof bin Ahmad) という男性の監督官が訪問した。彼はザアバ¹⁰⁾の弟で、彼の訪問がアイシャの人生のステージを開いた。彼は、マレー語学校修了後にカジャン¹¹⁾の修道会学校 (Sekolah Convent) に進学させる優れた生徒を探しており、アイシャが選ばれた。しかし、父は英語学校に行くことは多くの罪をもたらすと思っており、校長の説得に耳を傾けな

ル出身の母ラジャ・オヤーとバハン出身の父アフマドの間に生まれた。セプテのマレー語学校およびアタブのメソジスト女子学校で英語教育を受け、1929年にマレー人女性として初めてケンブリッジ上級試験に合格した。ビクトリア学院に進学して教育学を修め、1932年に英語教員の免状を取得。アメリカ留学を打診されるも父親の反対で断念し、1932年からスランゴール州のマレー語学校の監督官となる。コンティックの職務は学校の訪問や教育指針の策定で、コンティックは給与を貯めて3,000リングするオースチン社の車を買って学校を訪問した。当時のスランゴール州には、女子マレー語学校4校を含む24校しか学校がなかった。戦後、コンティックがマレー語学校監督官に復帰し、夫の海外赴任に同行するために辞職した1956年までに、州内のマレー語学校は120校まで増えた [Ahmad Kamal Ariffin bin Mohd. Rus 2010: 143-149]。

8) ブキラヤ・マレー語学校は、非常事態宣言(1948~1960年)期に近くの村人が共産主義者と関係をもったとして取り壊された [Aishah Ghani 1992: 3]。

9) コンティック・カマリア・アフマド (Kontik Kamariah bt. Ahmad, 1911~2006年、以下、コンティック。原文ではコンティックへの言及には全て敬称Cikがつくが、本稿では省略している)は、1911年、クアラルンプールのセプテで、ジョーホー

10) 本名はザイナル・アビディン・アフマド (Zainal Abidin bin Ahmad, 1895-1973年)で、ペンネームのザアバ (Za'ba) で知られる文筆家、思想家。

11) カジャン (Kajang) は、スンガイスライから南へ15kmほど下った町。華人、マレー人、スマトラやジャワの出身者などが住居や店を構えていた [Gullick 2004: 94-96; 122-124]。以後、地図上にない地名のみ注で補記する。

かった。アイシャは父の決定に深く失望した。「私の父がコンティックさんの父のようだったら進学を妨げたりしなかっただろう」と考えた。しかし、父と母を愛していたので、涙をのんで両親の決定を受け入れた。

ブキラヤ・マレー語学校の最終試験でアイシャは最優秀成績を収め、月給15ドルの教師研修生になった。11歳で教師になったアイシャは勉強のほうが好きだったが、友人たちのように家に閉じ込められるよりも先生になる方がいいと考え、喜んでいて。ジェンデラム¹²⁾のマレー語学校で教えるよう指示されたときに再び悲しみが訪れた。この異動は両親を動揺させた。両親はアイシャが親元から離れることを認めず、結局、アイシャは教師をやめることになった。選択肢は尽き、アイシャは家にいるだけになった。

4. インドネシアへの旅立ち

アイシャには予感があった。母は裁縫道具を買い揃え始めた。アイシャはその後どうなるかをよく知っていた。誰かに求婚されたらすぐに結婚するという友人たちと同じ運命を迎えるのだと。アイシャには、今度こそは逆らわなければならないという衝動が沸き起こっていた。母親が刺繍枠を持ってきて、道具をずっと前に購入していたのだから縫い物をするようにと言ったある晩、アイシャは「落雷が地面を割るかのような」大声で叫び、庭に裁縫道具を投げ捨てた。アイシャは「学校に行かせて、結婚させないで」と叫んだ。学校に行く望みが叶わないなら悪いことが起こると母を脅した。困惑した母親は同じように泣き続けた。アイシャは数日間何も食べなかった。その状態を見て親戚たちは話し合いをした。義理の兄アブドゥル・ハリムが、西スマトラのパダンパンジャンにあるディニア・プトリにアイシャを進学させるようアイシャの両親に勧めた。

末っ子だったアイシャは甘やかされて育った。両親は、アイシャがインドネシアのディニア・プトリで数年間勉強することを許さざるを得なかった。

嫁入り支度は他人の土地への旅支度が変わった。

12) スンガイスライから南に35kmほど下ったランガット川下流の地域。北スマトラのマングイリン出身者が住むジェンデラムヒルル(Jenderam Hilir)と、西スマトラのミナンカバウ出身者が住むジェンデラムウル(Jenderam Hulu)とがあり、両者の間は1960年代に至るまでほとんど交流がなかったという[Gullick 2004: 120]。アイシャが異動の辞令を受けたのがいずれの村の学校だったかは不明。

義理の兄は、寄宿学校であり女子専用の宗教学校であるディニア・プトリで受ける教育について詳しく教えてくれた。彼は、ディニア・プトリのような宗教学校は500人の学生を収容できる寮をもっており、多くのインドネシアの女性指導者がここで教育を受けてきたと語った。インドネシアに発つ前、村をインドネシア出身の女性教師ダルウィサ(Darwisah)が訪れたことがあった。村人全員が彼女の講演を聞きにきたので、村の小さな礼拝所は混雑した。講演はイスラムの女性観に触れ、女性の社会参加を制限するものではないと語った。アイシャはそれを聞いた両親がうなずいているのに気がついた。

1936年2月5日は待望の日だった。午後9時、アイシャと父はシンガポール行きの郵便列車に乗り込んだ。カジャン駅まで見送りに来た年老いた母に別れを告げるのは悲しく心が痛んだ。アイシャはまだ12歳だった。シンガポールに向かう列車で、遠ざかっていく母のことを思い出して一晩中泣いた。一方で、当時のマレー人社会の女性に対する時代遅れの姿勢から脱却することに成功したとも感じていた。

初めてシンガポールに到着したときの幸せは表現しきれないものだった。自分のような田舎の女子がシンガポールにすることが信じられなかった。プカンバルとパダンパンジャンに行く小さなボートを待つのに、ラティフ・モヒディン¹³⁾の父ハジ・モヒディンの家に2日間滞在した。

5. 女子イスラム寄宿学校ディニア・プトリ (1936～1939年)

1936年2月10日、アイシャと父は西スマトラの火山のマラピ山の麓のパダンパンジャンに到着した。パダンパンジャンの町は、小さいけれど、涼しい風が吹いて快適だった。ディニア・プトリまではバス停から馬車に乗った。ディニア・プトリは全寮制で、女子のための民間の宗教学校だった。既婚の若い女性もいたが、その数はわずかだった¹⁴⁾。学生は多く、寮だ

13) マレーシアの現代画家アブドゥル・ラティフ・モヒディン(Abdul Latiff Mohidin, 1941-)。ラティフ・モヒディンは1941年にスグリスピランのルンゲンに生まれ、シンガポールのコタラジャ・マレー語学校で初等教育を受けた。父のハジ・モヒディンはシンガポールのカンボングラムでメッカ巡礼者向けの宿泊施設を経営していた。

14) 1923年設立当初のディニア・プトリには多くの既婚女性が在籍したが、未婚女性の人間形成に主眼を置いたラフマの教育姿勢により、次第に未婚女性だけを対象とするようになった。生徒が学校で過ごす時間は寮の整備とともに24時間体制へと変化し、学習と生活全ての面にわたる女子教育が行われるようになった[服部 2001: 116]。

けでも600人以上いた。スマトラとジャワ出身者が最も多く、他にマルク島、アンボン島、ティモール島、カリマンタン島、スラウェシ島などの出身者もいた。マラヤ出身者は、シャムシア・ファケフ¹⁵⁾、サキナ・ジュナイド¹⁶⁾ら、アイシャを含む数人だけだった。

寮の設備は簡素だった。丘の水源をひいてつくった大きなため池で水浴びと衣類の洗濯ができ、水道水は飲用に限られた。寮の建物は学生数に対して手狭だったため、ベッドはなく、夜10時にマットレスと枕を屋根裏から降ろし、毎朝5時半にまた屋根裏に戻した。毎晩アイシャと友人たちはぎゅうぎゅうに並んで寝た。寮は窮屈で不快だったが、女の子たちは楽しさと幸せを感じていた。若者たちは退屈を知らず、常に新しい経験を求めている。

ディニア・プトリはバランスの取れた教育を提供していた。宗教科目を中心に、オランダ語、英語、経済学、歴史など他分野の科目もカバーしていた¹⁷⁾。教師は女性と男性の両方だった。すべての生徒は修了

まで7年間勉強する必要があった。これに加え、機織りなどのさまざまな活動に参加することが奨励され、夕方には選択に応じてさまざまなトピックについて話し合うフォーラムが開催された。食事は提供され、生徒が調理することは認められなかった。ウルランガットの人里離れた村から来たアイシャは、寮の賑やかな環境に慣れることを困難に感じた。

校長のラフマ・エル・ユヌシア¹⁸⁾に迎えられたとき、アイシャは彼女の顔を見てびっくりした。ラフマの顔には、退却の意味を知らない鋼の精神が映し出されていた。ディニア・プトリは彼女の努力でとても有名になった。ラフマ校長はアイシャに、アラビア語の教科のある宗教学校に入学したことがあるかを尋ねた。アイシャはあると答えて、4年生にいと伝えると、4年次に編入することになった。本格的に宗教学校で学んだわけではなく、マレー語学校の傍ら宗教科目を学んだだけだったので戸惑ったが、7年かけずに卒業したかったので、4年次から学ぶことに同意した。

アイシャの入学手続きを終えると、父はマラヤに戻った。授業についていけなくて苦労したが、それを知っているのは神だけだった。毎朝教室に入るとき、神の祝福が心の目と思考を開き、友人たちと渡り合えますようにと念じた。最初の学期テストの後、すべての科目の成績が赤インクで書かれた非常に残念な通知表を受けとった。

母を亡くすという試練にも耐えねばならなかった。世界は真っ暗になった。母はアイシャを送り出して3か月後に亡くなった。母の名前はマユナと言った。母を失うことは、10代のアイシャにとって、人生の光を失うことを意味した。アイシャは、墓参りのためにマラヤに戻るか、野心と勉強を追求するかで葛藤した。ラフマ校長はとても同情し、忍耐をもって神の試練を受け入れるよう説き、亡くなった母親に子ができる最善の助けはコーランを読むことであると思いを出させた。ラフマ校長の助言で、アイシャは耐えて勉

15) シャムシア・ファケフ (Shamsiah Fakeh, 1924-2008年、以下シャムシア) は、1924年スグリシンピラン州クアラビラーの村ゲムルーで貧しい家庭に生まれた。シャムシアは8人きょうだいの第2子(長女)で、初等教育終了後にディニア・プトリに進学した。在学中にディニア・プトリの学生たちのナショナリズム志向を感じたのちに回顧録で述べている。1940年に政治情勢の悪化を受けてマラヤに戻り、プランギに新たに設立されたイスラム高等学校に進学するも、校長が勧めた結婚のために1年も経たずに退学した。1944年には妊娠8ヶ月で一方的に離婚され、その後も結婚と一方的離婚を経験したことで女性の抑圧に強い問題意識を持つようになった。第二次世界大戦後、マレー人左派政党PKMM(マラヤ・ムラユ民族党)に参加し、PKMMの女性組織AWAS(Angkatan Wanita Sedar: 女性覚醒運動)の第2代部長となった。PKMMが非合法化され、AWASが解散する1948年6月まで部長を務めたのち、シャムシアはマラヤ共産党に加わってゲリラ活動に身を投じた[Manderson 1980: 55, 62, 173; Helen Ting 2013: 158-160]。

16) サキナ・ジュナイド(Sakinah Juned, 1922-2004年、以下サキナ) は、1922年にペラ州パダンランガスのカンボンランで生まれた。父はスマトラ出身の著名なウラマーのシャイク・ジュナイド・タラ、母はサリヤ・ハジ・サイド。ディニア・プトリを卒業後、パダンパンジャンのイスラム女性師範学校に進学し、1945年に教員免状を取得した。戦後はAWASのパダンランガス支部長として活動し、1947年にクランタン出身のモハメド・アスリ・ハジ・ムダと結婚した。モハメド・アスリは汎マラヤ・イスラム党(PAS)の設立メンバーで、のちの総裁。サキナもPASに入党して婦人部の部長を務めた[Ahmad Boestamam 1979: 60-62; Ng Cecilia, Maznah Mohamad and Tan Beng Hui 2006: 17-18; Pertiwi 2004: 410-411]。

17) 1928年までは宗教科目とアラビア語科目だけが教えられており、地理学を除く本格的な普通科目は1931年以降に導入が始まり、これ以降、普通科目の割合が急速に増えていった。1938年時点のカリキュラムでは、初等段階で4割強、中等段階で6割強が普通科目で、オランダ語は1937年、英語は1938年から教えられるようになった。普通科目としては、他に、インドネシア語、歌唱、絵画、保健、算数、簿記、裁縫などがあり、実生活で役に立つ科目も学ぶことができた[服部 2001: 118-119; 314-317]。アイシャがディニア・プトリで学んだ1936年から1939年は、こうしたカリキュラムのもと、宗教科目とアラビア語科目と普通科目の割合が概ね均衡していた時期だった。

18) ラフマ・エル・ユヌシア (Ibu Rahmah El-Yunusiyah, 1900-1969年、以下ラフマ) はディニア・プトリの設立者。1900年12月20日に西スマトラ州パダンパンジャンのブキットスルガンで生まれた。両親は母ラフィアと父ムハンマド・ユヌス・イマディン・ハファザ。父はメッカでイスラム諸学を修めた名声のあるウラマーで、42歳の時に16歳だったラフィアと7度目の結婚をした。ラフマは5人きょうだいの末っ子で、改革派ウラマーだった実兄のラバイ(1890-1924)が1915年に設立した男女共学のマドラサのディニア・スクールで学んだ。兄ラバイの勧めで16歳の時に結婚したのちも勉学のために別居生活を続け、1922年に和解の上で離婚。翌1923年、女子イスラム学校ディニア・プトリを設立した[服部 2001: 104-105; 126-135]。

強を続けることにした。礼拝のたび、アイシャは人生の悲しみに立ち向かう忍耐力が与えられますようにと神に祈った。勉強でつまずいたときにも、母を亡くしたことの辛さが試練となった。

ディニア・プトリでの最初の年は、大きな挑戦の連続だった。アイシャは苦手を克服するために勉強に専念した。その甲斐あって、期末試験では成績が上がり、以後は、大半の友人よりも優れた成績を取めた。

ディニア・プトリの規則はとて厳しかった。女子宗教学校として、服装は非常に重視された。服は裾の長いバジユクルン、パティック、ムダワラ(長いトゥドゥン)を身につけた。生徒が家族以外の男性に挨拶するのは違反行為とみなされた。すべての手紙は、受取人に配達される前に検閲された。自由に出歩くことも禁止されていた。ただし、学校は生徒の好みに応じて休日にグループを編成したので、滝へのピクニックや、美しいシンカラク湖に行った。アイシャは友人としばしばマラピ山に登った。ミナンカバウの習慣を知るために結婚式に連れて行かれることもあった。

ディニア・プトリでは1936年初めから1939年まで勉強し、この4年間でたくさんの思い出ができた。植民地化されたすべての民族が植民者の手から逃れるために努力しなければならないことに気づき始めたのはこの時期だった。当時のインドネシアのオランダ政府は非常に残酷だった。植民地主義者に対して勇気を持って発言した人は誰でも、政治家の流刑地ボーベンディグルに送られた。アチェ出身の友人チュット・ファティマ(Tjut Fatimah)は、母親が妊娠6か月のときに父親がボーベンディグルに流刑となったため、父親に会ったことがなかった。他の多くの人も同様の運命をたどっていた。

多くの居住者がいる寮にいたことは、リーダーになるための訓練の機会となった。アイシャは研修部門を率いる講演者に選ばれた。研修部門には政治に興味のある友人たちが集まった。寮には、ジャカルタのバライプスタカが発行した読み物や物語の本を入手できる小さな図書館もあった。植民者たちの残酷さを憎む気持ち、植民者と戦う精神はここで養った。1939年の終わりにアイシャはディニア・プトリで7年生まで修了し、卒業証明書を付与された。勉強を続ける友人の多くは、ムアリマ¹⁹⁾というディニア・プ

19) 1937年に設立された女性師範養成のための3年制の上級学校(Kulliatul Muallimat Islamiyyah) [服部 2001: 115-116]。

トリの師範養成学院に進学した。アイシャは西スマトラのパダンにあるイスラム・カレッジ²⁰⁾で勉強を続けることにした。

6. イスラム・カレッジ(1940~1942年)

村を離れてほぼ4年がすぎた1939年の終わりに父や親戚に会いに戻った。アイシャは再度、母がすでにいないという辛い事実に向き合った。母の墓で、固い墓石を抱きしめることしかできなかった。長くよその地域に住み、たくさんの友人たちに囲まれていたので、村に戻ったアイシャは孤独に混乱した。村は以前と同じように静かで、ランガット川の流れも朝の澄んだ水面も変わっていなかった。古くからの友人はすべて結婚しており、子供が2人いる人もいた。

アイシャがマラヤに戻ったのは休暇のためで、その後、西スマトラに戻る予定だった。今回はパダンパンジャンではなく、西スマトラの首都パダンへ。パダンはインド洋沿岸の都市で気候は暑かった。アイシャがパダンのイスラム・カレッジで勉強を続けることを父は認めた。イスラム・カレッジは男女共学のイスラム師範学校(Maktab Perguruan Tinggi Islam)で、アイシャの兄モハメド・アリも在学していた。

アイシャは1940年の始めにイスラム・カレッジに入学した。修了までの期間は4年で、必修の宗教科目のほか、植民地政庁の学校や一般の学校で教えられる基本的な科目はすべてカバーされていた。このような教育の目的は、現代のいかなる生活にも適応できる真のイスラム教徒を生み出すことだった。伝道活動(bertabligh dan berdakwah)もなおざりにはされなかった。このような教育設計のもと、学生は、イスラム教が望ましいとする前向きでバランスの取れた生活態度を身につけていた。カレッジの卒業証書の価値は仕事を見つけるためのものではない。学生たちは、卒業後に事務員になることなど考えていなかった。教師、農民、ビジネスマン、または彼らができるどんな仕事においても、日常生活の中でイスラム教徒としてより良く生き、進歩する方法を模索していた。余裕のある人はアメリカやオランダなどで勉強を続けた。

イスラム・カレッジの教員には、エジプトのアズハル大学出身のイスラム学者と、ジャカルタのオラン

20) 詳細は不明。マフムド・ユヌスは1930年代半ばのミナンカバウに師範養成マドラサ(カレッジ)が13校あったとしている[Mahmud Junus 1960: 96-103]。

ダ語学校や法学院 (Rechtsche Hogeschool) を卒業した人々がいたが、女性教師はいなかった。彼らは皆、知識だけが人間の心の空虚を埋めることができると信じる過激なナショナリストの若者で、学生たちは民族闘争の精神を植え付けられた。教師たちは、生徒たちを深い覚醒に導くために犠牲をいとわない政治の闘士だった。アイシャは、ディニア・プトリでの勉学や雰囲気とは大きく違うカレッジでの勉学に大きな変化を感じた。アイシャは寮生だった。寮に住んでいたのは15人のみで、費用は高いかわりに快適だった。男子生徒と女子生徒の親交が自由で、教室に男女を区切る仕切りもないことに驚いた。

カレッジは全く新しい世界だった。男女とりまぜて友人関係ができたのは初めてで、男性教師もまだ若者だった。アズハル大学を卒業したウスタズ・ヤハヤのようにメッカ巡礼を行った人もいたが、彼らはパンタロンとネクタイを着用し、ターバンを着用していなかった。女子学生はバジュクルンとトゥドゥン・ムダワラを着用していた。多くの人が恋愛したり不適切な行為に至ったりしているように見え、カレッジでの自由な親交が悪い結果をもたらすのではないかとよく思った。

1年が過ぎたころ、宗教教育を受けた学生たちは日々の親交のなかでも節度を維持していることに気がついた。当時の友人は皆、神が喜ばない悪い誘惑は信仰によってのみ制御できると考えていた。仲間の学生の間で恋愛すべきでないというのはカレッジの伝統になっており、恋愛感情をもつようなことがあれば仲間から信頼できない学生だとみなされた。学生たちの態度はとても良く、男女の友人たちと一緒に歩くことについての心配や不安はなかった。満月の日に夜遅くまで浜辺を散歩することもあった。

学生たちは『ラヤ』(Raya)という月刊誌を発行しており、アイシャも編集スタッフになる機会があった。当時、「インドネシア・ラヤ」²¹⁾という曲が流行していた。スカルノ、ハッタ、S.K.トリムルティなどの民族闘士の名前はアイシャらの賞賛的だった。宗教の勉学を重ねたことで、イスラム教における女性の地位をコーランの解釈学に従って正しく理解することができた。それは、女性を単に子孫を増やすための存在とみなす村落社会の考えとは異なるものだった。

21)「偉大なるインドネシア」の意味。青年音楽家ルドルフ・スプラトマンが作詞作曲し、1928年に開かれた第2回全国青年インドネシア会議で初披露された。独立後、インドネシア国歌となった[土屋 1994: 101]。

イスラム教の教えによれば、女性は教育者かつ夫の妻としての役割を果たすために教育を受ける必要がある。イスラム教の観点からは、女性の立場はより高貴であり保護されている。

7. 戦争の影とマラヤへの帰還

1941年の終わりごろから、平穏な生活は第二次世界大戦の勃発によって妨げられ始めた。パダンの町は日本の攻撃から逃れられなかった。当初、イスラム・カレッジは通常通り開いていたが、日本の攻撃が激化すると閉鎖を余儀なくされた。1942年の戦況と情勢の悪化の中、アイシャは養母²²⁾ ラトナ・サリ²³⁾の故郷カユタナムに避難した。状況は混沌とし、住民は皆、避難先を探していた。スガイスライ村にいる父や家族との連絡は完全に切断されており、父からの毎月の送金も途絶えていた。情勢が落ち着くまで、数ヶ月間そこに滞在した。

カユタナムに滞在している間、アブドゥル・アジズ・アブ・ハッサン (Abdul Aziz bin Abu Hassan、以下アブドゥル・アジズ) と知り合った。アブドゥル・アジズは、教育者として有名なウンク・シャフィー (Ungku Shafie) が運営する能力開発学院で英語を教えていた。マラッカ出身のアブドゥル・アジズはクアラルンプールのカンボンバルに住んでいて、経験を積むためにカユタナムまで旅をしていたのだった。アイシャと同様に滞在先で取り残された数人の友人を支援してくれた。

イスラム・カレッジは再開されたが、日本人の暴力はさらに酷くなり、ほんの数ヶ月で再び閉鎖された。爆撃の被害は次第にひどくなった。生活資金が底をついたアイシャは焦りを感じた。実家に招待してくれた男性の友人もいたが、全て断った。どこに滞在できるかいつも考えていた。最終的に、同じクラスの女性の友人ハリマ・マルズキ (Halimah Marzuki) が、ミナンカバウのバトゥサンカルにある彼女の村に招待してくれた。幸いなことに、彼女の家族は裕福で、

22) マレー人社会には、留学や出稼ぎなどで子を親元から離れた場所に出すときに代理親を立てる習慣がある[前田 1974: 74]。

23) 出身地などからインドネシアの政治家ラトナ・サリ (Ratna Sari, 1914-??年) ともとれるが、詳細な記述がないため、不明。政治家のラトナ・サリは1914年6月1日に西スマトラのパダン・パリアマン県で生まれた。インドネシア・ムスリム統一協会 (Persatuan Muslim Indonesia: Permi) の指導者の1人として活動し、1933年に他の指導者が一斉逮捕されると、女性として初めて総裁に就任した[White 2012: 111]。

食べることには不自由しなかった。しかし、マラヤにいる父や家族の状況を考えてと不安だった。兄はカレッジを卒業してウルランガットに戻っていた。誰かの家に住むことは気づまりで、ましてあちこちに逃げ回って時間を無駄にすることにうんざりしていた。

戦争と勉学の頻繁な中断に苦しんでほぼ2年間がすぎていた。本や雑誌を読むことに多くの時間を費やした。1943年、クアラルンプールのカンボンバルからパク・ピー (Pak Pii, Shafei氏の通称でピーおじさんの意味) が、父親からのお金と手紙を持ってパダンバンジャンに到着した。パク・ピーの2人の子供はディニア・プトリで勉強しており、パク・ピーはマラヤ出身の13人の女子学生全員を故郷に連れ帰るためにやって来たのだった。パク・ピーを通して、アイシャは、父と家族が戦争の惨禍を免れたことを知った。アイシャたちはすぐに荷物をまとめた。パダンバンジャンからプカンバルまで、ひどく状態の悪いバスで一晩かけてたどり着いた。プカンバルは小さな町だったが、小船が停泊できたので、シンガポールへの接続に重要な場所だった。

人数が多かったため、シンガポールに乗っていく船を見つけるのは非常に困難だった。インドネシア人の船頭が漕ぐはしけ船で、スマトラ島北岸のブンカリスに向けて出向した。プカンバルからブンカリスは遠く、はしけもそれほど大きくなかった。15人は、足を伸ばすことさえできずにつめて座り、夜も座ったまま寝た。ブンカリスはシアク川の河口にあり、はしけ船を漕げるのは干潮時のみだった。満潮ではしけ船を係留しなければならぬときには、降りて水浴びをし、そのあと上陸して歩いた。罰を受けているような旅だった。プカンバルとブンカリスの間は160kmに満たない距離だったが、シアク川を下るのに26日かかった。シンガポールへは海を渡るの、はしけで旅を続けることはできなかった。

パク・ピーは、乗船できる船を散々探して、やっとのことで荷物を運ぶモーターボートを見つけた。モーターボートには乗客用の設備がなく、所有者はアイシャたちを乗せるのを嫌がったが、ついには同意した。アイシャたちは床の上に直に座った。海に放り出されないように、端には横木が結ばれていた。モーターボートがシンガポールに向かって海を破るような急発進をしたとき、アイシャがどれほど強い不安を感じたかは、神だけが知っていた。アイシャたちが座っていた場所は海面から30センチほどのとこ

ろで、波が少し強いだけでも頭から膝までずぶ濡れになった。食べ物はなく、飲み物だけ与えられていた。出航から2日目の夜、中国語の低い音がとても大きく聞こえた。ボートが沈むと思った。ボートの一部は燃えているようだった。何人かは母親を呼んで泣いた。パク・ピーは、落ち着いて神のことを思うようにと言った。幸いアイシャたちは命を拾い、その小さな試練を乗り越えた。

2泊3日の航海の後、シンガポールに到着し、ジョンストン埠頭²⁴⁾に降ろされた。数日間ただ座っているだけだったので、アイシャと友人たちはまっすぐ歩けず、つまずいてばかりだった。膝の頭ががくがくし、体も力が出なかった。その後、シンガポールからクアラルンプールまで夜行列車に乗った。クアラルンプールに戻るのに1か月以上の旅をしたのだった。クアラルンプールに着いてからも、スンガイスライに戻る車がなく、どうしていいかわからなかった。しかし、突然、義兄のアブドゥル・ハリムがボロの自転車に乗って現れた。荷物の大半は海に投げ込んだので、荷物は数着の服だけだった。ボロの自転車に乗って無事に村に戻り、父と家族に再会した。長い旅とシアク川での漂流で日にあたりすぎ、肌は真っ黒に焼けていて、親族 (anak-anak buah)²⁵⁾ですらアイシャだとわからないほどだった。

8. 日本軍政期の暮らし

村を出てから8年近く経っても、村はあまり変わっていなかった。以前、大通りを車が通ることは滅多になかったが、戦争以降、日本のトラックがドゥストゥア²⁶⁾の拠点まで往来していて騒がしかった。日本兵は時々村を歩き回り、彼らが望むものを何でも求めた。彼らがココナッツジュースを飲みたければ、村人たちを木に登らせた。鶏が欲しければ捕まえてこさせた。村人たちは、日本兵による徴発に非常に腹を立てていた。日本兵は、コーヒーショップで男たちがおしゃべりするのを嫌がった。しかし実のところ、人々はどこでもおしゃべりした。話の種は、マラヤを占領する日本の嘘を非難することで、村人た

24) 原文はJohnson's Pierだが、Johnston's Pierの誤記と思われる。

25) anak buahは、母系社会の親族集団内で年長男性からみた姉妹の子どもを指して使われる語彙。アイシャから見た母親の姉妹の子供たちを指す。

26) ドゥストゥア (Dusun Tua) は、スンガイスライから大通りを7kmほど北上した地点にあるランガット川沿いの村。

ちは、誇大宣伝されていた空虚なプロパガンダに騙されていると感じていた。日本はすべての物品、特に米と布を安くするよう命令したが、反対のことが起こった。米は日増しに手に入りにくくなり、手に入れたのは石灰米 (beras kapur) という、長持ちするよう石灰をまぶした黄色い米だけだった。シダの芽やキャッサバの葉のスープ (gulai) と一緒に食べる石灰米は、かび臭くてざらざらした味がした。

村人の多くはゴム採取人だったので、日に日に困窮した。ゴムは採取して日が経つと売れなくなるためだった。特に1943年には食料や衣料品の入手が非常に困難になり、困窮を極めた。小麦粉やグラニュー糖などの輸入品はまったく見られなくなった。菓子は、キャッサバ、サツマイモ、バナナで作った。栄養が不足し、多くの人が全身の腫みに苦しんだ。子供たちは十分に食べられず、いつも空腹で、さらに苦しんだ。誰かが死んでも、埋葬には困難が伴った。遺体を包む白い布 (kafan) は手に入らなかった。闇市場にあったとしても価格が高すぎた。したがって、遺体はバティック布で包むだけになった。残念なことに、夜に墓を掘って遺体を包んでいるバティック布を盗む泥棒もいた。

スンガイスライでの苦しい生活に耐えられなくなり、アイシャは義兄の家族と一緒にヌグリスンビラン州ルンゲンのスンガイマチャンに引っ越した。そこで水田稲作に参加させてもらう考えだった。義兄は宗教教師だったので、スンガイマチャンでは以前ほど生活に困らなくなった。日本兵が村に来ることはめつたになかった。ただし、スンガイマチャンが共産主義者の拠点と言われていたプロガ²⁷⁾ からそれほど遠くないことが不安の種だった。この状況で、心を落ち着け試練に耐えられたのは、以前受けた宗教教育のおかげだった。それでも、子どもやお年寄りの苦しみを見ると悲しく辛かった。

ある日、アブドゥル・アジズが、植民地主義者を心から嫌っていたスタン・ジュナイン²⁸⁾ を伴ってやって来た。スタン・ジュナインが反植民地運動に関与したという話も、彼が政治的左派と非常に近いという話も聞いたことがあった。2人はクアラルンプールから自転車で来た。スタン・ジュナインは政治の話

をしに来たのではなく、アイシャに、娘のザハラニ (Datin Zahrani) と一緒にスレンバンに滞在し、孫たちにコーランの読誦を教えてほしいと頼みに来たのだった。ザハラニは、のちにスランゴール州首相を務めるアブ・バカル・バギンダ (Dato' Abu Bakar Baginda) の妻だった。先行きが定まらないまま村に住むのも退屈なので、この招待を受けることにした。アイシャはゴムを積んだトラックでスレンバンに行き、子供たちにコーランの読誦を教えながら、スタン・ジュナインの2人の娘と日本語を勉強した。

9. 単身ペラへ

その後、ペラ州パダンルンガスのヤハヤウイア (Yahyawiyah) 宗教学校で教師になる誘いを受けたので、スレンバンには長く留まらなかった。仕事を得る好機だった。ヤハヤウイア学校は、パダンルンガスの町からそう遠くないカンボンララン²⁹⁾ にあった。当時、この学校は女子のみの学校で、アイシャの着任によって生徒数が増えた。カンボンラランには、水牛、鶏、アヒルがいて、水田と果樹園があった。人々は他の場所のように飢餓に直面していなかった。村人たちは、水田、キャッサバとサツマイモを植える土地、飼育用の鶏とアヒルを提供された。村人の助けでできた作物を売り、そのお金はスンガイスライにいる父に米を送るために貯めておいた。

第二次世界大戦はほぼ4年続いた。1945年にはさまざまな噂話を聞くようになっていた。日本とその同盟国が敗北し、イギリスが再びマラヤを植民地化するという話も聞いていた。不安定な状況でカンボンラランに住み続けることに不安を覚え、学校をやめてルンゲンの姉の家に戻った。

戦争は限りない害悪と不幸をもたらしたが、人々と女性に利益になることもあった。日本人が来たことで、植民地支配から逃れるためには努力しなければならぬと多くの人々が気づいた。植民地主義の束縛から逃れられない限り、自分の国の主になることはできなかった。第二次世界大戦は、女性に対する社会の態度が変わる転換点になった。女性は家を出るようになり、行商のために列車でシャムまで行って米を手に入れてくる者もいた。女性は食べ物や着

27) プロガ (Beroga) はヌグリスンビランとスランゴールの州境に位置する町。スンガイマチャンから州境沿いに約12km北上した地点。

28) スタン・ジュナイン (Sutan Jenain) はインドネシアとマラヤで活動していたジャワ出身の左派活動家。

29) カンボンララン (Kampung Lalang) は、パダンルンガスの中心部から北へ約2kmの村落。カンボンラランは、ディニア・ブトリでマラヤ出身の同窓生だったサキナ・ジュナイドの出生地でもあるが、回顧録では特に触れられていない。

るものを手に入れるため、夫を助けて働かなければならなかった。パダンルンガスからスレンバンまでの郵便列車のなかで、女性が食料品の仲買人をしてのを見た。女性が家に閉じ込められているままでは多くが飢え死にするかもしれないという状況が、彼女たちを家から出したのだった。村々には作物や古着を売る女性もやってきていた。宝飾品を売りにきた人もいた。女性たちは家族を助けるために何でもしたのだ。

おわりに

アイシャと同世代のムスリム女性の就学率は極めて低く³⁰⁾、師範学校まで進学したアイシャの教育歴は突出していた。この背景として、初婚の平均年齢が15歳前後という当時の結婚慣習と、これに伴って未婚の女性に課された行動制限とが、行動範囲や交際範囲の拡大を意味する就学との間に大きなギャップを含んでいたことが挙げられる。アイシャの少女時代の思い出のなかで最も強い葛藤が描かれたのは、マレー語学校の修了前後だった。英語学校への進学を断念し、異動に反対されて補助教員の職を辞したことで、事実上の閉居状態となり、母親に嫁入り支度を促されたのだった。学校を修了した時期は、アイシャが閉居の年齢に差し掛かり、子どもから行動制限が課される未婚の女性へと社会的な位置が転換した時期であった。

他方、アイシャの進学の道を開いたのも、当時の社会状況だった。アイシャが学校に通うきっかけを作った義理の兄はインドネシア出身の宗教教師だった。アイシャの両親と同じくスマトラ出身と考えられる義兄アブドゥル・ハリムは、改革派ウラマーたちによる教育改革や男女共学のマドラサ設立が進んだ時期に青少年期を過ごし、女性による学問の探究をコーラン解釈学に基づいて積極的に評価した世代の人物であったと思われる。この流れを汲んで設立されたディニア・プトリは、宗教的な理論立てに基づいた女子学校として、慣習と就学との間の規範面でのギャップを埋める位置にあった。

その後のアイシャの遍歴においても、避難先や転

居先の選択に、未婚の女性としての規範と制約を一定程度見出すことができる。そうしたなか、ペラ州への単身での赴任は例外的だが、これについての詳しい経緯は記されていない。女子宗教学校への赴任であり、専門知識を身につけた故に可能になった移動であると同時に、日本軍政下の厳しい生活状況のなか、ムスリム女性に課された行動制限は社会全体で変容していた。パダンルンガスからの列車に生活のために働く女性が乗り合わせていたように、多様な背景の女性が同時代的にこうした移動を経験していたことも、遠方のペラに単身で移り住むことを選択できた背景と言えよう。

日本軍政期に顕著に進んだ女性の職業進出の結果、1950年代から60年代にかけて、男女の賃金格差の是正は、家族法の改革と並ぶ女性の社会的地位に関わる法改革の柱となった。戦後も女性労働者は増える一方、ほとんどの分野で女性の賃金は男性より劣っており、雇用差別の撤廃を求める労働運動が展開された。また、戦後になって女子教育が急速に普及した。女性の就労や就学は女性の行動範囲と結婚適齢を変化させ、娘を若年で結婚させることを前提に親が未婚女性の行動を監視するといった規範も問い直されていった。

アイシャは、1945年以降、政治運動に身を投じるとともに、女性の視点から書く記者としてメディアの世界に参入していくことになる。少女アイシャの葛藤が『カラム』の時代に接続されてからの展開は別稿で検討したい。

参考文献

- Ahmad Boestamam. 1979. *Carving the Path to the Summit*. Ohio University Press.
- Ahmad Kamal Ariffin bin Mohd Rus. 2010. "Tan Sri Datin Seri Cempaka Hajjah Kontik Kamariah". *Sarjana*. Vol. 25, No.3. pp. 143-160.
- Aishah Ghani. 1992. *Aishah Ghani—Memoir Seorang Pejuang*. Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Arba'iyah Mohd Noor. 2010. "Tan Sri Dr. Hajjah Aishah Ghani: Penggerak Kemajuan Wanita UMNO". *Sarjana*. Vol. 25, No.3. pp. 125-142.
- Dancz, Virginia H. 1987. *Women and Party Politics in Peninsular Malaysia*. Singapore. Oxford University Press.
- Del Tufo, M.V. 1949. *Malaya, a Report on the 1947*

30) スランゴール州における15歳以上のマレー人ムスリム女性の識字率は1931年に8.6%(男性46.2%)、1947年に22.1%(同63.4%)と、アイシャの世代以降で伸び始めたことがわかる。ここでのマレー人には、半島部出身のマレー人および島嶼部出身のその他のマレー人が含まれる[Del Tufo 1947: 91]。

- Census of Population*. Crown Agents for the Colonies.
- Mahmud Junus 1960. *Sedjarah Pendidikan Islam di Indonesia*. Pustaka Mahmudiah.
- Manderson, Lenore. 1980. *Women, Politics, and Change: The Kaum Ibu UMNO, Malaysia, 1945-1972*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Ng Cecilia, Maznah Mohamad and Tan Beng Hui. 2006. *Feminism and the Women's Movement in Malaysia: An Unsung (R)evolution*. Routledge.
- Pertiwi (Pertubuhan Tindakan Wanita Islam). 2004. *Biografi Tokoh Wanita Malaysia*. Pelanduk Publications.
- Roff, William R. 1974. *The Origins of Malay Nationalism*. (2nd edition). University of Malaya Press.
- Ting, Helen. 2012. "Shamsiah Fakeh and Aishah Ghani in Malaya: Nationalists in Their Own Rights, Femisists ahead of Their Time". Blackburn, Susan and Ting, Helen (eds.). *Women in Southeast Asian Nationalist Movements*. NUS Press. pp.147-174.
- White, Sally. 2012. "Rasuna Said: Lioness of the Indonesian Independence Movement". Blackburn, Susan and Ting, Helen (eds.). *Women in Southeast Asian Nationalist Movements*. NUS Press. pp.98-123.
- 土屋健治 1994 『インドネシア——思想の系譜』勁草書房。
- 服部美奈 2001 『インドネシアの近代女子教育——イスラム改革運動のなかの女性』勁草書房。
- 前田成文 1974 「マレー人の家族」『東南アジア研究』第12巻第1号、pp.66-77。
- 光成歩 2018 「花嫁の自立——ナドラの結婚からみる1950年代シンガポールの女性の地位」坪井裕司・山本博之編著『カラムの時代IX——マレー・ムスリムの越境するネットワーク2』(CIRASディスカッションペーパー No. 78) 京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.21-36。